

危つく転職を思いとどまった話

先ほどもBさんが、上司に嫌われて課を変わらされたので、会社を辞めたいと訴えられていましたが、これからの話も転職についてのことです。続けるということ、すぐ思い浮かぶ私の経験です。森田を続けたおかげで、私の人生の一大転機を、危いところで無事乗り切ることができた話です。

私と森田との出会いの原因となった症状は、強迫観念、特に人から疑われたり誤解されたりすることを極端に恐れる嫌疑恐怖を中心とした、強迫神経質症でした。これについては、発見誌の体験記中に詳しく述べさせていただいておりますので省略しますが、症状に最もとらわれたのは、東京にいたころのことです。

ちやうど、本社に転勤した翌年、課長代理に昇進してすぐのころ、相次いで起こった出来事に恐怖を感じ、落ち込みました。人事部から直屬上司に、私のノイローゼを心配する話があったことなどで、なお落ち込みを深め、昭和四十八年秋、高良興生院に二カ月半余りお世話になり、立ち直りのきっかけをつかみました。発見会に入会した四十九年から、五十四年ころまでの私は、集談会にとつて、いわゆるお客さんの時代でした。

まだ不安も強く、たまに集談会に出席しても、グチを言うことが多かったようです。会社で同期入社の人で課長になってゆくのに、焦りを感じ、上司に殻を破れと言われても、どうして破ったらよいかわかりませんでした。しかし、悩みつつも、森田にすぎる以外にないと思い、発見誌は読み続けていました。続けているなかで、悩みながら何かを身につけつつあったようです。

人より遅れるというみじめさは、当時の私には耐えがたい屈辱でした。あのころ、この屈辱に耐えられず、会社をやめようとなりました。話の発端は、駅前にある父の所有地の有効利用法を考えることだったのですが、そのうちに当時まだ初期の段階であったコンビニエンス・ストアの将来性にひかれ、某大手スーパー系の会社と提携して父の名義で地域販売権を得て、開業すべく店舗まで建てました。会社をやめて、これを私が経営するつもりで、その概要を、会社の直屬上司にも話しました。

もうだいぶ、過去のことになりましたので、今では笑って言うこともできますが、五十八年に体験記をまとめたころには、まだ生々しすぎて触れられませんでした。

当初は父が猛反対でしたが、説得の末、折れてくれたのでした。私も一大決心をしてとりかかろうとしておりました。しかし、ここで幸いだっただのは、 magari なりにも森田学習を続けていたことであり、ありがたかったのは、今にして思えば、私が神経質で不安が強く、完全欲が強く、気になる性格であったことです。会社をやめて新しい事業にとりくむためには、雑草のような遅しさを身につける必要があるかと思ひ、長い間欠席していたS集談会に、五十五年四月から出席するようになりました。そこで、出席を継続していた人の進歩の著しいのに気づき、愕然とし、それをきっかけに集談会には毎月必ず出席しようと思ひました。

すぐ学習会にも出て、森田を再学習し、まだまだ気分本位になりがちなことなど、反省させられる点が多々あることに気づきました。転職を準備しての実生活の困難のなかでの受講でしたから、起こってくる諸々の不安や苦悩、そのまま感情における事実として、受けとめてゆかざるを得ないという態度を、即ち森田でいう「事実唯真の立場」、「あるがまま」の態度を、この私の人生の大切な節目に、学習を継続していたおかげで身につけさせていただいたように思ひます。昇進の遅れに対する考え方についても、H常任理事や同期受講のかたのお話などで力づけられ、その後の支えとなりました。

それまでとまったく異なった新しい業務への期待と、次第に募ってくる不安とに駆られて、会社が終わってから夜十一時十二時まで、また、休日などにも、その系列の店舗を訪ね、話を聞きました。

当時まだ数少なく、京阪神に散在していた二十店余りのコンビニエンス・ストアを訪ね、地域販売権をもつ自営業の人たちの苦労話や、その将来性などを聞かせていただきました。私は当時この分野の仕事に、のめり込むようにひかれておりました。訪れたこれらの自営業の人たちは、皆、苦勞されているだけに大変親切で、話も興味深いものでした。また、それだけに、大企業サラリーマンを見限ることを思いとどまるよう熱心に、長時間、説得してくださるかたもいく人かあり、私はその間で迷い、悩み続けました。

しかし、現実を目のあたりにして種々学ぼううちに、反対にサラリーマンのありがたさも見え出しました。そして店舗が完成してからなんと二年余りも悩みつつ検討を続け、大切な瀬戸際で踏みとどまったのです。それまで見ていたサラリーマン生活を、別の目で、即ち複眼で見られるようになってきたのでしよう。あるいは、森田でいう「両面観」が身につくようになったのかと思ひます。もしあのとき、転職に踏み切っていたら、朝七時から夜十一時まで営業という事業の性格と、その後の業界の厳しさなどを考えると、余裕の殆どない、家庭も犠牲にした、厳しく偏った生活を余儀なくされていたと思うのです。

転職がどんな場合でもよくないと言つつもりは毛頭ありませんが、私の場合、ヒヤリとするような危い綱渡りを、よく無事にできたものだ、ふりかえつてみて思ひます。それでは、建てた店舗はどうなったかと申しますと、けがの功名というのでしようか、前述の大手スーパー系会社に、当初は暫定的に、しかしその後もずっと賃貸していき、結構な家賃収入となり、私のサラリーマン生活を、背後から支えてくれることになりました。転職を考え始めたころは、まだ森田を生涯学習として自覚していませんでしたが、とにかく、続けていたおかげで、大切な転職に最も良い選択をさせていただくことができたと思ひます。

その後少しして、長い間屈辱をかみしめていた会社の方でも、課長にしていたことができました。発見会とともにあったおかげで、きわめて困難な実生活の中で、人の思惑などの観念よりも実践が大切であるという「実践の立場」を次第に身につけていただいたのだと思ひます。その後も、続けるなかで、いろいろな経験を積み、強くなってきたように思ひます。人に私の経験を話すとモ外な一面を知ったように驚かれます。人生は面白いです。私の底にある強い欲求の現れなのだということに、気づかせていただいています。Bさん以外にも、仕事の適性、転職の是非などでよく悩まれCさん、Dさんなども、厳しい境遇の中に教えられる可能性のあることも知ってほしいと思ひます。